



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.238
2023.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第52回 ● 「加曾利B1式」生成論の要諦

敗戦後の復興から高度経済成長へと突入り、埋蔵文化財保護行政は開発事業への取り組みを進め、全国各地では発掘件数の激増と共に発掘面積も大規模化へと向かい、出土遺物は種類・量共に爆発的な増加を辿る。そうした状況を山内清男は「縄紋景気」と揶揄しつつも新たな比較文化史研究を強化し、「新しい比較研究の気運が熟した」(山内清男(1964)「緒言」『日本原始美術I』、講談社)と縄紋式文化の始原に「矢柄研磨器」等による大陸方面との連絡・交渉を模索する。

晩年(1969年)の山内清男は草創期が中心となる「縄紋各期土器型式(関東地方)の概要」(「縄紋草創期の諸問題」所収)を開陳するが、「堀之内2式」と「加曾利B1式」等は『図譜』を継承する。

その後「縄紋景気」は止まる所を知らず、1980年前後には年代的にも地方的にも『図譜』の標本だけでは「土器型式」同定に困難が伴う状況が顕著となり、従来にも増して「土器は土器から、文様帯は文様帯から」への「相似」による「文様帯シーケンス」導出を経る解決に重要性が置かれ、第53図の「高井東式」等新たな「土器型式」制定や「曾谷1・2・3・4式」等殊更の「細別」が必然化、それを以て加曾利B式にも「新しい比較研究の気運が熟した」のである。因みに今後の論を進めるに当たり、「加曾利B1・2・3式」等の記載は「加曾利」を省略し、「B1・2・3式」等と短縮表記する。

では、第53図編年に観る「B1式」の「細別」

関東 (1980-3-1 作成)	石川県 (1997-12-20 作成)
加曾利B1 a式	「道下元町式」1期
b式	2期
c式	3期
d式	「馬替1式」1期
e式	2期
加曾利B1-2式	「馬替2式」 (+)
加曾利B2式	「酒見式」「米泉1期」

▲第54図:「酒見式」成立階段と加曾利B式「細別」との対照表

から順次研究の到達点を確認するならば、先ずはその始まりである「B1式」生成論が問われることになる。文献(1980b・c・1981・1986・1999a・2002a・2014)は、「B1a式」が西関東の「B1a式武相系列」等を始めとして西は北陸・中部、北は三陸以北の広域に連絡・交渉する「相同」関係に触れる。特に文献(1999a)が導出する第54図編年の如く、石川県に於ける「道下元町式1・2・3期」/「馬替1式1・2期」/「馬替2式」~「酒見式」への「相似」関係による「文様帯シーケンス」は、関東の「B1a・b・c・d・e式」期/「B1-2式」~「B2式」期と対照されるべく地域間相互の連続性が交響しており、甲信駿の「土器型式」は関東と北陸の中間地域であるだけに「相同」関係が更に濃密となる。

「B1式」生成論の伝統的基盤は「堀之内2式」最終末の形態と装飾に求められ、「B1a式」制定後に解説した文献(1981)の「第5節 加曾利B1a式精製土器様式の一類型について」では、「B1a式」として『図譜』図版23(1:高田貝塚、2:矢作貝塚)の平縁深鉢2個体を標本とする磨消縄紋を施文しない「横線文類型」が「堀之内2式」からの変遷に最も「相似」な文様帯と指定された。その後の資料の蓄積は図版23よりも古式の「横線文類型」として第55図(さいたま市馬場小室山遺蹟第30次第3号住居址出土土器)1・4の磨消縄紋を施文しない作法の独立性が注目を浴び、2の内文浅鉢との「型式組成」に至るならば、「堀之内2式」直後、かつ「B1a式」直前の「細別」と位置付けられる。これまでは神奈川県下北原遺蹟14号敷石住居址出土土器の「横線文類型」が「B1a式」でも図版23の直前に位置付けられ、「B1a式」の最古階段とするが、文献(2002a)

で再吟味を果たし、「B1a式」生成論の見直しを進め、「堀之内2式」→馬場小室山遺蹟第30次第3号住居址(「堀之内3式」)→下北原遺蹟14号敷石住居址(「B0式」)→図版23(「B1a式」)へと変遷階段を稠密化した。

しかしながら、「B1a式」生成論の課題を極めるには、『図譜』図版22(1:良文貝塚、2:馬込貝塚、3:高田貝塚)の注口付土器3個体を標本とする「櫛描文(多条束線文)類型」生成論の解明が待ち構えている。注口付土器の形態は図版22解説に尽きだが、装飾原体の受容は広範な「相同」関係に由来が求められ、その由来こそが「B1a式」生成論の真骨頂となる。

即ち、文献(1999a)に於いて既に「多条束線文」は加曾利B1式では注口付土器に発達しており、(中略)深鉢への展開は中部方面からの影響を除けば殆ど定着しない。それに対して道下元町遺蹟では種々の文様と構成されながら変遷している状況があり、加曾利B1式注口付土器文様の成立過程に相互作用の洞察が必要である。(中略)西関東の「加曾利B1a式」に充填度の低い例が注口付土器に定着し、深鉢にも進出しており、恐らく共時的な現象と推定している。」との地理的勾配による選択的受容論に至り、畢竟、北陸・中部の「多条束線文」が「B1a式」の特定器種に分化して共時的な「相同」関係で受容される図版22の「櫛描文(多条束線文)類型」は、「堀之内2式」から「B1式」への新たな「横の構造」としての「文様帯プランチ」例である。更に「文様帯プランチ」は「文様帯シーケンス」との年代的交差により「細別」としての「文様帯インダストリ」を構成するが、この「文様帯インダストリ」論は昭和5年の山内清男による「所謂亀ヶ岡式土器の分布云々」に原型を觀る。



▲第55図:馬場小室山遺蹟第30次第3号住居址出土土器

*巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B1式」生成論の要諦(第52回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第231回) 小野寺洋介 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第4回) 工業善通 …2	■考古学者の書棚 『総覧 縄文土器』 小松和平 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第4回)

工楽 善通

1968年の夏頃から開始していた岡山市津島遺跡における県立武道館建設に伴う発掘調査は、県教育委員会が実施していたが、弥生時代の各時期に及ぶ遺構が見つかり、古くから周知の遺跡であったにもかかわらず、そこへ県の公共施設を建設することは無謀である、という考古学研究者や市民の声が高まり、さまざまな団体から建設反対の署名や声明文が出されるようになった。勿論文化庁宛にも届いた。文化庁は遺跡の適正な判断をすべく異例の独自の調査団を作り、津島遺跡の精査を進めるために岡山県に発掘調査の補助金を出した。この調査団は八幡一郎先生を団長におき、調査員は文化庁職員およびその付属機関である東京・京都の国立博物館と、奈文研の考古職員で構成された。文化庁からは亀井正道さんと田村晃一さん、東博からは野口義麿さん、京博からは鈴木博司さん、奈文研からは佐原・八賀・阿部さんと工楽が交替して参加することとなり、'69年2月から発掘調査のため、各館からのメンバーも岡山へ入った。

この調査は保存を前提として実施したものであるため、これまでの発掘地を大きく広げることがはしなかったが、微高地に設けられた弥生時代前期の集落跡や、同期の水田域を見つけるなど大きな成果を上げることができた。

発掘調査中は、武道館建設地を囲うフェンスの外側では、時折、遺跡保存を訴える叫びや、われわれ文化庁の調査に対して反対のシュプレヒコールが飛び交う中での作業で、岡山大学の近藤義郎先生と対峙する場面もあった。しかし、日中はそうであっても、夜には和島誠一先生も加わり、平和的に発掘成果を聞いていただいたり、時にはお酒を酌み交すこともでき、八幡一郎団長も時々は東京から見学に見えて、近くのめし屋で皆と一緒に昼食を共にし語り合うなど、実に稔り多い発掘調査であったと言える。各所のダメ押し調査や図面取りなど現場での全ての作業が終ったのは4月末日で、田村さんと工楽で宿舍の片付けを終わって、岡山を引き上げたのは5月3日であった。

その後、文化庁と岡山県教委が協議して、この地での武道館建設は取り下げ、1971年には国の史跡として保存整備することとなった。

前回到記した奈文研から文化庁記念物への出向は、その後、1967年3月に町田さんが2年間の勤めで奈良へ戻り、その交替で松下正司さんと三輪嘉六さんが上京した。坪井さんは3年勤めで'68年3月に戻り、替わって横山浩一さんが出向した。'69年春には松下、三輪氏の出向が解けて、その交替要員を出す年になっていた。その3月末、私が津山遺跡から一時帰奈中に、坪井さんから津島の発掘が終ったら文化庁へ出向するように言われた。私は先年おこなった小郡遺跡の発掘調査報告書の作製を福岡県教委と約束していることもあって、出向することは困ると返答したが、そんなことはお構いなしであった。この人事は奈文研の職員組合へ

も伝わり、文化庁出向反対の声が盛んとなった。この時の奈文研職組の委員長は明大同窓の佐藤興治さんで、所長は彫刻史の小林剛さんであった。そんな中、5月末に所長が心筋梗塞で急死し、出向問題は中断となった。6月中旬になって坪井さんから、7月には東京行きだと強く言われ、従わざるを得なくなった。

7月1日に記念物課へ辞令をもらいに行った。そこで、4月1日から既に着任していた野口義麿さんとの出会い、2月の津島遺跡以来の再会であった。なんと野口さんの隣の席に私の机が用意してあったのには驚いた。そしてお互いに何でもこんなことになったのだろうと言いつつ、翌日には東京での宿舎探しに回ったが、すぐさま見つかるわけがなく、しばらくの間は知人宅へ居候することにして、引越準備のため奈良へ戻った。4～5日たって記念物課へ初出勤した。私の課での歓迎会が同月の23日に新橋近くで開かれ、その日はアポロが月面着陸する日で、月から送られてくる映像を店のテレビで皆で見たのが印象的だ。

この頃記念物課には研究職として、埋蔵文化財係に、横山・田村・野口がおり、史跡係には、平野邦雄・仲野浩・安原啓示さんが居た。ここでの私の日常的な仕事は、全国の各県教委を経由して提出されてきた発掘届の処理であった。その書面に記された発掘担当者や調査内容について、田村さんや野口さんが予め目を通し、不備のない届け出物件について発掘進行の通知を出すことで、当時週に100件くらいは片付けていたと思う。また、埋蔵文化財係の大きな仕事として、毎年全国の重要な考古学的遺跡を選定して、国の史跡に指定した上で保存を計ることであった。これには以前から予定し準備を進めていた遺跡もあるが、ここ数年の内の変動などによる崩落や劣化に対処し、緊急に保存を構する必要性が生じた遺構、さらに、土地開発によって発掘調査をした結果、重要な遺跡と判断され、その開発計画を変更し保存を計る等、緊急性の高い物件が新たに出現することも多い。

このような案件は文化庁の「文化財保護審議会」の埋蔵文化財部会で専門家によって審議される。そのための資料作りは我々の大仕事だった。その会議用資料の作成と印刷は当時ガリ版刷で、私はそれを作るのがイヤでたまらなかった。2年後にはやっと外注するようになり、ほっとした。

略歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
"	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
"	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
"	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本唯久先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 231

史跡 五色塚古墳 小壺古墳

～兵庫県神戸市垂水区

小野寺 洋介

六甲山系の西側に続く丘陵地が大半を占める神戸市垂水区は、瀬戸内海から大阪湾岸を望む風光明媚な景勝地として古来より知られる。五色塚古墳(全長194mの前方後円墳)と小壺古墳(直径70mの円墳)は、周囲よりも南側に突出し、眼下に明石海峡と淡路島を望む海岸段丘上に築かれた古墳である。

五色塚古墳の最も古い記録として『日本書紀』神功皇后摂政元年二月の記事があり、仲哀天皇の偽陵として築いた「山陵於赤石」が五色塚古墳に比定されてきた。明治以降は埴輪や葺石がみえ、石棺と思わしき石材が露出することが八木榮三郎などの研究者達によって報告されている。

五色塚古墳と小壺古墳は1921(大正10)年に兵庫県ではじめて国史跡に指定された。その後、両古墳は長らく比較的良好な状態で保存されていたが、戦後に五色塚古墳の墳丘が開墾されるなど荒廃が進み、市民や研究者から保護の必要性が提唱された。これを受けて、神戸市教育委員会と当時の文化財保護委員会との間で協議が行われ、1965(昭和40)年から遺跡の復元整備に向けた発掘調査が実施された。発掘調査は1975(昭和50)年までの10年間に及び、五色塚古墳には斜面全域に葺石を葺き、3段あるテラスの全てに鱗付円筒埴輪および鱗付朝顔形円筒埴輪からなる埴輪列が検出され、周濠内に島状遺構や通路状遺構を備えることが判明した。また、小壺古墳は2段築成で葺石は葺かず、テラスと墳頂部で円筒埴輪列を検出した。両古墳とも出土した埴輪などから4世紀後半に位置づけられた。

五色塚古墳の復元整備は発掘調査と並行して実施された。大型前方後円墳を築造当時の姿に復元する整備手法は、国内では五色塚古墳においてはじめて用いられた。この案は当時の文化財保護委員会の担当者であった坪井清足によるものであり、その後の全国の古墳や遺跡の整備事業に影響を与えた。そして、五色塚古墳は1975(昭和50)年に史跡公園として公開された。

以上のように五色塚古墳と小壺古墳の整備はいったん完了したが、1980年代以降に五色塚古墳の北側と東側で発掘調査が行われ、五色塚古墳に外溝がめぐることや、小壺古墳にも通路状遺構が備わることが判明した。このため、神戸市教育委員会は外溝を確認した敷地の一部を現状保存とし、管理するなどの措置を講じた。しかし、現在までに十分な活用がなされていないことが課題として残った。また、高度経済成長に伴う

発掘調査の増加や、阪神・淡路大震災の復興事業に伴う発掘調査により発掘調査報告書の作成も中断されていた。しかし、先達職員たちの尽力により、2006(平成18)年に発掘調査報告書が刊行された。その後、出土した円筒埴輪の一部が2012(平成24)年に国重要文化財に指定された。

五色塚古墳と小壺古墳は、現在は地元のNPO法人と協力して管理・運営を行っており、いつ遺跡を訪れても草刈りが行き届き、古墳上にゴミが落ちていない状態が維持されている。近年は来園者数もコロナ前から増加傾向にあり、年間で4万名ほどが訪れる。古墳の全域を復元した墳丘は、築造当時の古墳の姿をわかりやすく示しており、歴史を習い始めた小学生たちへの学習効果が期待される。2019(令和元)年には、百舌鳥・古市古墳群が世界文化遺産に登録されたことにより古墳自体への注目度が上がり、「樹木で覆われていない古墳を見に来た」といった声も聞こえ、波及効果もあったようである。毎年4月にはNPO法人主催の「春の古墳まつり」、6月には神戸市主催の「五色塚古墳まつり」が開催され、地元の方々にも足を運んでいただくなど、地域づくりの場としても認知されつつあると思われる。

2020(令和2)年には、長年の懸案であった史跡整備の指針となる「史跡 五色塚(千壺)古墳 小壺古墳整備基本計画」を策定した。このなかで、五色塚古墳および小壺古墳の本質的価値が整理された。2023年(令和5)年現在は、この基本整備計画に基づいて未整備部分である五色塚古墳北側の整備工事と、史跡の価値を周知するためのガイダンス施設設置が計画されている。具体的な内容については検討段階であるが、史跡としての五色塚古墳と小壺古墳の重要性や価値を余すことなく紹介するとともに、今まで培ってきた地元のNPO法人や、垂水区役所の関係部署と連携して地域の魅力発信を通じて、まちづくりに貢献できるような役割が果たせたら理想と考える。

私が史跡管理と整備を担当してからは、TOHO animationと連携して五色塚古墳を舞台としたアニメミュージックビデオが作成されたり、最寄りの駅である山陽電鉄霞ヶ丘駅に副駅名として「五色塚古墳前」を入れたり、史跡を文化財的な面だけではなく観光面や地元PRの面からもアプローチする動きがある。すでに文化財全般の積極的な活用や発信が全国的にも求められており、この要求を満たしていくこともこれからの史跡整備の課題かと思考するところである。

史跡五色塚古墳の墳丘上からは、海と空を背景に淡路島や瀬戸内海を一望することができる。当然、街並みや明石海峡大橋が架かるなどの変化はあるが、古墳の上からみる海や空の景色は古墳時代から不変であり、墳丘上に登るだけで当時の人々の追体験ができるような錯覚を起こさせる。是非とも多くの方々にも本史跡まで訪れていただきたいと願う次第である。

参考文献:

- 神戸市教育委員会 2006「史跡 五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書」
神戸市教育委員会 2020「史跡 五色塚古墳 小壺古墳整備基本計画—保存管理と整備・活用の指針—」

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは森山由香里さんです。



▲五色塚古墳から淡路島を望む

考古学者の書棚

「総覧 縄文土器」

小林達雄 編／アム・プロモーション (2008)

小松 和平

「はいこれ。土器がわからなかったらこれを読めばいい」
とある日の考古学研究室、先輩が本棚から分厚い本を取り出し、私に渡してきた。

(なんだこの厚さは。枕より厚いぞ)

これが今回紹介する『総覧 縄文土器』との出会いであった。この時まで生まれてこの方、こんな分厚い本を手にとって読んだことはなかったが、渋々本書を片手に大学所蔵資料の整理を進める。しかし、接合されていない小片の文様を見ても、載っているどの土器の一部なのかさっぱりわからなかった。掲載されている実測図は小さく、縄文初心者だった私には実測された土器の文様が沈線なのか隆帯なのかなどを判断できず、悩んでいた。

「この本からどうやって施文されている文様の種類を判断するんですか。素人目にはわかりません」

先輩に八つ当たりしたところ、発掘調査報告書なるものを渡された。実測図とともに、実測図と同じ角度で撮影された土器の写真が載っているではないか。掲載されている実測図も大きく、写真と見比べやすい。これなら実測図における文様の表現が分かる。

(これも総覧と一緒に渡してほしかった)

と内心思いながら勉強を進めた。文様の表現を理解した後に、もう一度『総覧 縄文土器』と対峙した。

「見える、見えるぞ！」

前までは絵にしか見えなかった実測図が、立体的に見えるではないか。沈線、隆帯、刺突、燃糸文……、器形に合わせた文様区画など、各土器型式の特徴を理解した瞬間であった。その後は現在に至るまで、本書は各土器様式の概要や原体の種類などを学ぶ上で欠かせないものとなっていった。

さて、私と『総覧 縄文土器』との出会いについて語ってきたが、ここからは本題である本書の紹介をしていこうと思う。

本書は1322頁、3部構成となっている。第I部では小林達雄氏によって、縄文土器の編年等を考えるうえで基本となる「様式・型式・形式」について論じられている。小林氏曰く様式(Style)とは、「型式間において共通した雰囲気」であり、視覚的や触覚的などの総合的斉一性でまとまるものを指す。これを縄文土器に当てはめて土器様式の広がりを見ると、5つの領域に大別されるという。この領域は、同じ流儀を遵守しながらもそれぞれ異なる型式の土器を製作する集団の地域的なまとまりのことである。つまり様式とは、ある特徴を有する複数の型式のまとまりのことである。型式(Type)については山内清男氏のいう型式とは同語異義ということに触れながら論じている。ここでいう型式とは、極めて強い共通性を多く有し、他と区別されるグループのことである。簡単に言うと、堀之内1「式」や大洞BC「式」といった土器型式名のことであり、ここで使用される「式」は型式の「式」である。形式(Form)は、ずばり器種のことである。深鉢「形」土器、浅鉢「形」土器などといった器種名で使用される「形」は形式の「形」である。

第II部は様式各説となっており、縄文時代草創期～晩期の土

器をそれぞれ地域ごとに各研究者が解説している。各様式・型式によって細部は異なるが、研究史、土器製作法、土器の形式と使用法、施文具の種類、文様、編年、C14年代測定データ、様式の系統、分布と地域性について書かれている。研究史では、本書が出版された2008年までの研究史がまとめられており、土器を研究する者にとっては必読項目となっている。土器製法技法では、器厚、胎土、調整、繊維の有無など、土器を形成する要素について触れられている。施文具の種類・文様では、どの施文具をどのように使い、どの順番で文様を施すかなど型式決定に欠かせない要素について書かれている。様式の系統では、先行・後続する様式に触れ、どの様式の影響で標題の様式が誕生したかなどが書かれている。

第III部は特論・各論となっており、縄文土器に関する様々な論考が掲載されている。縄文土器の研究者でなくとも報告書執筆の際に目を通すであろう項目は、土器の製作に関する論考や各器種に関する論考だと思う。土器製作に関する論考は、土器観察表の作成や土器型式の決定をする際に重要になってくる。胎土中の混和材や網代・敷物について、中でも私が重要と考えるのが施文原体と施文具の種類論考である。とくに縄文原体について理解するには、論考を読むことはもちろん、実際に自ら原体を作成し、粘土に施文することをおすすめする。また、各器種について理解すると思わぬ発見をすることがある。大学時代の先輩とともに私が所属する秋田県埋蔵文化財センターの所蔵資料を見ていたとき、有孔罎付土器を発見した。秋田県に有孔罎付土器は存在していないことになっていたため、この発見によって有孔罎付土器が東日本全域に広がっていたことが判明したのである。縄文土器の器種をある程度把握していると、一風変わった土器に出くわしても、「変な土器」で終わるのではなく、他地域からの搬入品もしくは影響を受けた土器だと予想がつく。縄文時代の遺跡を担当される方には、こちらを読んでいただきたい。

最後になるが、縄文時代は約13,000年も続いた時代であり、それゆえ情報量が多い。大学の指導教授や縄文土器のいろはを教えてくださいました師匠からは「先史時代である縄文時代の時期決定には縄文土器が欠かせない。だから学生のうちから専門でなくても勉強しておきなさい」と言われ、今ではその言葉のおかげで仕事が成り立っている。就職してからの4年間で、応援を含め大小8遺跡に携わったが、そのうち6遺跡が縄文時代であった。縄文土器を勉強していたおかげで、現場で遺構の時期決定を瞬時に言い処理するなど現場を円滑に回せるようになってきた。あの日の私のように縄文初心者の方にとって『総覧 縄文土器』を単品で扱うのは難しいと思うが、いろんなものと組み合わせることによって最高の縄文土器ガイドブックへ変身する。拙文を最後まで読んでいただいたこの機会に、『総覧 縄文土器』という厚い扉を開いてみてはどうだろうか。

アルカ通信 No.238

発行日 2023年7月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp